

出來やうと思ふのである。(終)

合理的團體漁法の提唱

理學博士 宇 田 道 隆

人も不足、物資も不足でしかも増産をはからねばならない今日である。無から有を産めといふが如き困難なる課題と思はれるかも知れない。だが可能の路は残されてゐる。科學の力と協力して合理的經營を行ふことがこの困難を突破するものであらねばならぬ。先づ遠洋漁業の例を取らう。

従來のやり方は全く皆バラバラであつた。拔駈けの功名をお互ひに競ふやうな、戰爭に例へると一騎々敵と渡り合ふやうな源平時代のやうすにも似てゐた。

だが今日の時勢では最早そのやうな非能率なことは許さない。魚群に對する近代的戰鬪は漁船隊の團體的漁法を以て行はれねばならぬと考へる。

従來の漁撈法は個々の竿釣、延繩、網などに就て高度に研究されてゐるが、團體的漁法に關しては南水洋捕鯨の例の如き以外に殆んどやられてゐないやうである。新漁撈學の眼目を此處に置くやう専門家の研究を切望してやまない。

一漁船組合を單位とする漁船隊を考へやう。そこに旗艦にあたるもの、哨戒船にあたるものがあらねばならぬ。そこに聯隊中隊の如き組織があらねばならぬ。カツオを搜索に出かけるとしやう。魚群を搜すのに最も有效な船隊の散開隊形を以てある

海區を前進し、豫想された方面に搜魚の重點を置かう。この際其の船隊は一樣な水温等の調査を行ふと共に、特定船に特に細かい觀測調査を行ひ、いはばこの船隊の試験調査船であり、報道船である役割をつとめさせることにする。この船は同船隊のを纏めて中央水試へ無電で沖合通信を必らず行ふ。そして常に魚群の移動する前陣をとらへるやうに、其の船は餘り漁獲その物を見當にせず調へ且報道する。

従来の漁撈法は假々の竿釣、延縄、網などに於て高度に研究されてゐるが、團體自衛隊に關しては、自衛隊の隊の如き外に殆んどやられてゐないやうである。新漁撈學の眼目を此處に置くやう専門家の研究を切望してやまない。

一漁船組合を單位とする漁船隊を考へやう。そこに旗艦にあたるもの、哨戒船にあたるものがあらねばならぬ。そこに聯隊中隊の如き組織があらねばならぬ。カッオを搜索に出かけるとしやう。魚群を搜すのに最も有效な船隊の散開隊形を以てある海區を前進し、豫想された方面に搜魚の重點を置かう。この際其の船隊は一樣な水温等の調査を行ふと共に、特定船に細かい觀測調査を行ひ、いはばこの船隊の試験調査船であり、報道船である役割をつとめさせることにする。この船は同船隊のを纏めて中央水試へ無電で沖合通信を必らず行ふ。そして常に魚群の移動する前陣をとらへるやうに、其の船は餘り漁獲その物を見當にせず、且報道する。

魚群が発見され、その重心の所在が明確になれば、漁船隊はいくつかの適當な集團になつて集中的戰團隊形に移る。漁期中歸航するもの、復航するもの色々生ずるであらうが、絶えず緊密な連絡を保ち、統制ある行動をとる。縣水産試験場の指導船は縣内の幾つかの漁船隊を最もよく指導し、まとめて行くため全力を傾注して調査、試漁に専念し、收入豫算の如きは全く度外視すべきが理想である。

斯くの如き計畫を眞によく實行するためには一會社の傘下にあらねば絶對不可能であるといふならば、左様にするやうとめるべきである。又組合の協力によつて可能であればこれで結構である。

ただ問題は無駄を切り捨て、合理的經營に邁進する熱意の如何にある。増産を國家的の大局の見地から推し進めるためには些々たる私の利害の如きは踏み越えて行かねばならぬ。このことは定置漁業の經營に就ても適用出来る。同じ洄游路にある魚群を待ち受けて網を張る以上、共通利害を有するは當然である。

これを最も能率的に最小の勞力を以て最大の増産を擧げ得るやう、經營、調査、報道など一體となつて協力し行動しなければならぬ。試験調査は業者自ら行ふものと、水試の行ふものとが相補ひ、相助けて一つにならねばならぬ。

斯やうにすべての組織が出來たとする。次に問題になるのは(一)魚群の發見、(二)漁獲の豫想、漁獲方法、處理方法、配給、所要物資の購入等の事柄があるが、ここには海洋調査の關係する(一)(二)を吟味しやう。

物理的採礦法といつて、石油、鐵、銅など地下埋藏資源の探索に同地震を起して地震計で觀測したり、重力計によつて場所

による重力の分布をしらべたり、地中電流を流して流線の異状を見たり磁力の分布變化を磁力計で調べたり色々な方法があつて、現にアメリカでは石油などで盛んに行つてをり、ボーリングの巨額の浪費をそれによつて救ふことが出來た。海中にをる魚群を探索するには矢張り科學の力によるべきである。

即ち海洋調査の徹底によつて漁場の存在場所、魚群の數量は魚そのものか見えない場合でも推定出來る筈である。又超音波の如き探魚法を物理的試験をもつともつと科學者が海へ乗り出して行けばどん／＼成功する筈である。

筆者は水産に於ける本質的増産の鍵はここにあると考へる。そしてそれは今までのやうな役所の僅かの船に頼り、又役所の船は漁船同様漁ることに夢中ではいけない。どうしても民間業者と官廳とが一つになつて進む體制が出來てゐなければならぬ。實際やつてゐる人同仕が官民共睦をつき合し充分研究し合はねばならぬ。次に計畫的水産經濟の根本になるのは漁獲數量の問題である。これは全く掛け値のない正しい統計資料が充實することが缺くべからざる要件である。そしてそれに伴つて色々基本的な試験調査を進めて行けばよい。

今日はお互ひに無駄な競争をしたり、小さい殻に立て籠る時代ではない。吾々が手をとり合つて一體となり、最大の努力をして増産することこそ、眞の臣道實踐である。

個々は勿論であるが、個々よりもむしろ團體として、日本の水産全體が増産することが先づ何より大切である。餘計な垣や繩張りには皆叩きこわし、明るい日本の水産の建設のため懸命に働かねばならぬ。そうした意味で團體的漁法を眞剣に考究して頂くことを提唱し、相協力し科學の力を取り入れるだけ取り入れて操業することを水産海洋調査に携はる一員として切に望む次第である。近頃の感想を卒直に申し上げて諸賢の御教示を乞ひたい。(昭和十六年三月二日)